

令和元年9月2日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03136

研究課題名(和文)現代中東の「ワタン(祖国)」の心性をめぐる表象文化の発展的研究

研究課題名(英文)Research on Cultural Representations of "Watan/Homeland" in the Modern Middle East

研究代表者

岡 真理 (OKA, Mari)

京都大学・人間・環境学研究所・教授

研究者番号：30315965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円

研究成果の概要(和文)：アラビア語、ペルシア語、トルコ語、ヘブライ語など中東の諸言語で、中東地域で生産される作品のみならず、中東に歴史的出自を持つ者によって、欧米など地理的中東世界を超えた地域で、英語、仏語、独語、伊語などの西洋の諸言語で生み出される作品をも対象に、文学や映画などさまざまなテキストに現れた「ワタン(祖国)」表象の超域的な分析を通して、「ワタン」を軸に、近現代中東世界の社会的・歴史的ありようとそのダイナミズムの一端と、国民国家や言語文化の境界を越えた共通性および各国・各地域の固有性を明らかにすると同時に、近現代中東の人々の経験を、人間にとって祖国とは何かという普遍的問いに対する一つの応答として提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代中東世界でアラビア語をはじめとする中東の諸言語で、また欧米で、英語その他西洋の言語で生産される文学をはじめとする作品における「祖国」表象の分析を通して、近現代中東の社会的・歴史的ありようとそのダイナミズム、そして国民国家や言語文化の境界を越えた共通性とともに関国・各地域の固有性を明らかにすると同時に、近現代中東の人々の経験をを通して「人間にとって祖国とは何か」という普遍的問いに回答した。

研究成果の概要(英文)：Our research was conducted on works produced in the Middle East in Arabic, Persian, Turkish, and Hebrew, but also on those outside the geographical boundary of the Middle East, in the European language like English, French, German, and Italian, by those who have their historical origin in the Middle East, and it has revealed, through transregional analysis of the representation of "Watan/Homeland" that appear in various texts, both literary and visual, part of the social and historic states of the modern Middle East and their dynamism, focusing on "the Watan", as well as their similarities not limited by national border or regional boundaries, and natures peculiar to a specific country or region. The research also shows experiences of the people of the modern Middle East, answering to the universal question "what is homeland to a human being?".

研究分野：現代アラブ文学

キーワード：祖国 文学 表象 中東

1. 研究開始当初の背景

中東イスラーム世界は、言語や国家の境界を越えた有機的な言語文化世界である。元来アラビア語の「ワタン」が、中東世界の複数の言語で「祖国」を意味する語として流通し、中東近現代文学の主要モチーフとなっているのはその一例である。本研究参加者は、中東世界の諸文学に浸透するこの「ワタン」概念に着目し、2012年度から3年間、中東現代文学における「ワタン」表象の分析研究に取り組んできた(基盤研究C「中東現代文学における「ワタン(祖国)」表象とその分析」)。これを第1期ワタン研究とし、第2期にあたる本研究では、現代中東の「ワタン」表象を中東世界の文化表象一般に拡張し、より包括的な視点から分析することを目指した。

中東の諸言語で書かれた文学作品の研究は従来、ペルシア語文学、トルコ語文学、アラブ文学といった言語別の縦割り体制のもとで、イラン文学、トルコ文学、エジプト文学というように国民国家を軸になされてきた。その結果、「ワタン」をめぐる経験や思想も、一国文学の枠組みの中で分析・解析されるにとどまっていた。これに対し、第1期ワタン研究では、言語や国民国家の枠を超えて、国内の中東文学研究者が結集し研究に取り組むことで、「中東イスラーム世界」という枠組のなかで、「ワタン」表象を比較文学的視座から考察し、「ワタン」をめぐる展開する一連の問題群を、「中東イスラーム世界」に生きる人間の歴史的経験として、その共通性ならびに国民国家それぞれに固有の差異とともに把握した。その結果、明らかとなったのは、

(1)中東文学における「ワタン」というオブセッション: 中東現代文学では、「ワタン」をめぐる問いが、陰に陽に文学作品のモチーフとなっていること。

(2)中東世界を読み解く鍵概念としてのワタン: 中東現代文学では、植民地支配、独裁、占領、内戦、マイノリティ、ジェンダーなど、当該社会の歴史的経験や社会的・政治的問題が、「ワタン」との連関において描かれる傾向をもつ。「ワタン」は、中東諸社会における複合的問題群が展開されるための基盤のモチーフであり、「ワタン」表象を分析の対象とすることは、中東世界の歴史的経験や、中東諸社会が抱える諸問題を読み解く上で、きわめて有効な鍵概念あること。

(3)液状化するワタン: 中東の近代文学では、近代西洋との対比によって看取されるワタン、あるいは植民地支配からの独立・解放を希求するワタンが描かれた。このときのワタンとは多分にナショナルで、かつ領土的なものであった。しかし、ポストコロニアルの歴史的経験や近年のグローバルイゼーションを反映して、現代文学における「ワタン」とは、必ずしもナショナルな志向性や領土の実態を伴うものではなくなった。

(4)「ワタン」をめぐる思想の今日的な重要性と表象の多様化: 21世紀の今日、半世紀以上占領が続くパレスチナはもとより、2011年に始まる一連の革命とその後の混乱に見舞われるアラブ諸国や、2003年の戦争とその後続く占領、内戦に翻弄されるイラクなど、「ワタン」は時代遅れになるどころか、ますます今日的な重要性を帯びた思想的テーマとなっている。さらに現代では、ワタン表象のメディアも多岐にわたる。20世紀のワタン表象は、小説や詩などの文学作品や、文学の近接領域である映画や演劇といった、いわゆるハイカルチャーが主体だったが、今日では、グラフィティ(落書き)やヒップホップ音楽、ビデオ動画など多様な形でワタンを表象する作品が生まれている。

2. 研究の目的

第2期にあたる本研究では、より同時代の「現代」に重点を置きながら、中東域内で中東の諸言語で生み出される作品だけでなく、欧米世界で、中東に歴史的、文化的出自をもつ作家によって、英語をはじめとする西洋の諸言語で生産される作品にも対象を拡大し、さらに、ポピュラーカルチャーや現代アートを含む文化表象全般にも目を向け、「ワタン」的の心性が表現される現代中東の表象文化の分析・考察を通して、中東世界に生きる人間の今日的経験と、その社会の現在 の諸相をより包括的に把握することを目的とする。

本研究は、専門とする国・言語を異にする中東文学の研究者による共同研究であることを最大の特色としており、これにより、ある言語で描かれた経験を、当該言語世界、あるいは当該国家固有の経験に還元するのではなく、広く中東世界の歴史的経験という文脈の中で、他の言語や他の国・地域の作品と擦り合わせ、その経験の固有性や普遍性を検証することができる。その成果は、中東イスラーム世界に限定されない、現代世界に生きる人間の普遍的な歴史的経験に通じるものとして、他の地域の文学を理解する上でも参照されるものとなる。さらに、現代中東世界の文化的営為の多様性や豊かさを社会に知らしめることで、紛争による破壊や殺戮という暴力的なイメージに塗り込められがちな中東イスラーム世界について、それとは異なる、より共感的で人間的なイメージの形成に貢献する。

3. 研究の方法

中東世界という国家横断的な越境性のなかで文化表象を総合的に把握するため、本研究は、専門とする国や言語を異にする中東文学の研究者が参集し、ワタンという共通テーマのもと、共同研究を行った。第1期ワタン研究に分担者ないし協力研究者として参加してきた者たちを中核

として、中東世界の主要三文学である現代ペルシア語文学、現代トルコ語文学、現代アラブ文学、および北アフリカ仏語文学、さらに、クルド文学の専門家が、研究代表者・分担者・研究協力者として参加した。加えて、本研究は、中東に歴史的・文化的出自をもつ作家によって、欧米世界で、西洋の言語で生み出される作品も対象にしているため、ドイツやイタリア、北米など、欧米における中東出身者の文学やアートなど関連する諸分野の研究者が、新たに研究協力者として参加した。また、プロジェクト・メンバーとは別に、定例研究会には、適宜、関連する研究者を招いて報告をしていただき、ワタンに関する知見を広げた。

年2回、開催した定例研究会が、プロジェクト遂行の基盤となった。また、それぞれが専門とする言語を超えて、研究基盤を共有するために、「ワタン」に関係する中東現代文学の短編作品および長編作品（抄訳）を集成したアンソロジー『中東現代文学 2016』を刊行した。さらに、毎年、数名を現地調査、海外研究者との情報交換、および資料収集のために海外派遣した。そして、シンポジウムやワークショップを開催し、研究成果を社会的に還元すると同時に、紛争や破壊、殺戮という暴力的なイメージで塗り込められた中東イスラーム世界について、文学・アート・文化表象を通して、従来とは異なる中東像を提示し、この地域に対する人間的共感的理解を社会的に涵養するよう努めた。

4. 研究成果

1) 定例研究会

専門とする言語や地域の境界を越えて複数の研究者が参加する本研究は、そうであるからこそ可能となる知見の共有も、重要な研究成果だと言える。以下は、都合7回開催された定例研究会やシンポジウムで提供された貴重な研究事例である。

(1) 2015年、相次いで世を去ったトルコ、イラン、アルジェリアの代表的作家たちの生涯と作品の回顧を通して、言語・国家の違いを超えて、ほぼ同世代の中東文学者における「ワタン」について考察した。

(2) 従来の国民国家単位で「文学」を考える研究ではこぼれ落ちていた「クルド文学」に焦点を当て、トルコやシリアなど、帰属する国民国家を異にするクルド人作家について複数の報告がなされた。

(3) グルジア、トルコ、モーリタニアに関し、児童文学という観点からの報告があった。とりわけモーリタニアに関しては、文学に限らず、日本の中東研究において全般的にカバーされていない地域であり、貴重な知見に触れることができた。

(4) 「トルコ文学越境」と題するシンポジウムを開催し、トルコ共和国、アゼルバイジャン、ドイツのトルコ系移民によるドイツ語文学など、トルコ語圏の文学をテーマに3本の基調講演とパネル・ディスカッションをおこなった。従来の一言語、ないし一国民国家単位の文学ではなく、超域的に文学を把握する貴重な試みである。

(5) イタリア語でエリトリアの記憶を描くイタリア人作家の作品について報告があり、植民地支配の歴史とワタンの関係、とりわけ植民者にとってのワタンとアイデンティティの関係について議論がなされた。

(6) ドイツのトルコ系映画監督ファトヒ・アキンの映像作品、およびドイツにおける移民の1世、2世にとってのワタンについて理解を深める機会となった。

(7) イラクの国外で、破壊された祖国の記憶をグロテスクな筆致で書くイラク人作家の短編作品、およびドイツ在住でドイツ語で著述するイラク人作家の作品について報告があった。

(8) 『文学からシリアを考える 独裁・“内戦”、そして希望』と題するシンポジウムを開催、内戦下で現在、描かれている小説、シリアに内戦をもたらすことになった独裁体制が生み出す「監獄文学」、そうしたなかで制作されるテレビのコメディや舞台など、複数の視点から報告がなされ、シリアを多角的に理解する機会を提供した。

(9) 同年第2回研究会では、中央アジアの高麗人アーティストに関するドキュメンタリー映画についての報告があり、従来、文学的観点からは研究されてこなかった中央アジアと、そこにおける高麗人、さらに、そのアートについて、幾重にも貴重な知見を得る機会となった。

2) 海外の作家を招いてのワークショップ等

本プロジェクトでは、狭義の文学研究にとどまらずアートや演劇、映画にも注目し、作家を招いてのワークショップ、シンポジウムを積極的に開催・共催した。

(1) 2015年10月、「アラブ文学との対話」、アラブ出身の作家（エジプト、レバノン、イラク）3名を招いてのシンポジウム。

(2) 2017年4月「ラヒール・ワタン 祖国、我を去りて」、亡命イラク人アーティスト、ハーニー・ダッラ・アリー氏を招いてのトーク、講演会。

(3) 2017年10月、シリア映画「カーキ色の記憶」、監督を招いてのトーク、講演会。

(4) 2017年11月、岐阜県立美術館主催美術展「ディアスポラ・ナウ」、オープニング・シンポジウム基調講演、作家たちとのトーク。

(5) 2018年2月、「封鎖に抗して ガザ・アーティストは語る」、ガザの3名のアーティストをゲストにトーク、作品展示。

3) 海外派遣

オマーン、トルコ(クルド文学)、UAE(ムスリム児童文学)、スペイン(西サハラ文学)への派遣は、これまで文学研究的観点からはカバーされてこなかった地域・分野だけに貴重であり、今後さらに研究が深められることが期待される。

4) 総括シンポジウム

最終年度の2018年6月、2日間にわたる総括シンポジウムを開催、「ワタンとエグザイル」、「<祖国>という暴力」、「中東文学における<ワタン>の現在」、「ワタンと<性> ジェンダー・セクシュアリティ」、「ワタンの形成、ワタンの発見」、「<移民第二世代>とワタン」、「ワタンを想像/創造する」という7つのテーマで、合計20本の発表をおこなった。言語や国民国家、さらには地理的中東地域の境界を越えて、ワタンをめぐる文学や文化表象を考察・分析することで、超域的に共通する諸テーマを析出し、今後、研究をさらに拡張・深化・発展させるための研究基盤を構築できた。シンポで発表された論考は、本研究成果報告書として、『ワタンとは何か 中東現代文学における Watan/Homeland 表象』と題して刊行した。

5) 研究成果のアウトプット プロジェクト期間中、以下を刊行した。

1) 『中東現代文学選 2016』 2017年3月

アラビア語、ペルシア語、トルコ語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語で書かれた、中東現代小説(短編、長編)、エッセイ、詩の日本語訳のアンソロジー。

2) 『中東現代文学リブレット シンポジウム「トルコ文学越境」』 2017年3月。

3) 『中東現代文学リブレット シンポジウム「現代世界-中東・欧州-を<文学>から考える」』 2018年3月。

4) 『中東現代文学リブレット シンポジウム「<文学>からシリアを考える」』 2018年3月

5) 『ワタン(祖国)とは何か 中東現代文学における Watan/Homeland 表象』 2019年3月

また、最終年度の2018年7月には、セヴィリアで開催された第5回世界中東学会大会で、“Representation of ‘Homeland’ in the Modern Middle Eastern Literature”と題するパネルを企画し、プロジェクト・メンバー5名が参加、これまでの研究成果を英語で発表した。同パネルは、大会主催者により、同大会における「推奨パネル」に選ばれた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 50 件)

〔学会発表〕(計 42 件)

〔図書〕(計 26 件)

〔その他〕

『ワタン(祖国)とは何か 中東現代文学における Watan/Homeland 表象』(現代中東の「ワタン(祖国)的心性をめぐる表象文化の発展的研究」(代表:岡真理)成果報告書、340頁)所収論文一覧。

・岡真理「『ワタン』というプロブレマティク」pp.9-18.

・中村菜穂「異郷のペルシア語詩 ナーデル・ナーデルプールの祖国(vatan)と異郷(ghorbat)」pp.19-33.

・磯部加代子「母語からの追放 あるデルスィムの孤児たちの物語」pp.34-49.

・栗原俊秀「植民者の抱く郷愁 エリトリア生まれのイタリア人作家が描く 故郷の姿」pp. 50-66.

・岡崎弘樹「監獄としてのワタン シリアにおける監獄文学の変遷」pp. 69-82.

・天野優「ディアスポラという「ワタン」 ユダヤ系イラク人作家、サミール・ナッカーシュと祖国」pp. 83-97.

・小野田風子「新生国家エリートの孤独 タンザニアの作家E・ケジラハビにおける「ワタン」」pp. 98-115.

・宮下遼「『脱トルコ化』する物語 21世紀、トルコ・ポストモダニズム小説における「祖国」の解体」pp.119-132.

・福田義昭「現代エジプト小説における祖国(ワタン)像《断章》」pp.133-151.

・鶴戸聡「ナショナリズムに抗してネーションを構想する アルジェリア小説の展開と現状」pp. 152-158.

- ・藤元優子「女たちのサンクチュアリと祖国 『男のいない女たち』に見る小説と映画の間」 pp.161-175.
- ・石川清子「ラジオを聴くフランスのマグレブの母たち(とその娘たち) ヤミナ・ベンギギの作品から」 pp.176-193.
- ・佐藤 愛「「うちへ帰りたい」スヘイル・ハンマードにおける「ワタン」と女のセクシュアリティ」 pp.194-210.
- ・石井啓一郎「バクーからタブリーズへ注ぐまなざし ふたりのソヴィエト・アゼルバイジャン語詩人にみるワタンの再定義」 pp.213-229.
- ・田浪亜央江「委任統治期パレスチナにおけるワタンの発見 「ハリール・サカーキーニー日記」に見る 旅」 pp.230-243.
- ・竹田敏之「湾岸アラブ諸国における詩文化の興隆と国民アイデンティティの形成」 pp.244-260.
- ・細田和江「イスラエルにおける中東諸国出身ユダヤ人第2世代作家たちが描く祖国」 pp.263-274.
- ・鈴木克己「Father land / Mother tongue ドイツ語作家シェルコ・ファタハにおける祖国と言語」 pp.275-289.
- ・前田君江「ムスリム・マイノリティの児童文学と子どもたちを「可視化する」物語 ファウズィア・G・ウィリアムズの「イードの物語」を中心に」 pp.290-307.
- ・山本 薫「ハイファにとどまる エミール・ハビービーのワタン (Waṭan / Homeland)」 pp.311-322.
- ・鈴木珠里「「再び君を造ろう、祖国よ」スィーミン・ベフバハーニーの作品に見られるヴァタン像」 pp.323-336.

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：藤元優子

ローマ字氏名：FUJIMOTO Yuko

所属研究機関名：大阪大学

部局名：言語文化研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：40152590

研究分担者氏名：石川清子

ローマ字氏名：ISHIKAWA Kiyoko

所属研究機関名：静岡文化芸術大学

部局名：文化政策学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30329528

研究分担者氏名：宮下 遼

ローマ字氏名：MIYASHITA Ryo

所属研究機関名：大阪大学

部局名：言語文化研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00736069

研究分担者氏名：福田義昭

ローマ字氏名：FUKUDA Yoshiaki

所属研究機関名：大阪大学

部局名：言語文化研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：60390720

研究分担者氏名：山本 薫

ローマ字氏名：YAMAMOTO Kaoru
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：その他部局等
職名：非常勤講師
研究者番号(8桁)：10431967

研究分担者氏名：田浪亜央江
ローマ字氏名：TANAMI Aoe
所属研究機関名：広島市立大学
部局名：国際学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：70725184

研究分担者氏名：鵜戸 聡
ローマ字氏名：UDO Satoshi
所属研究機関名：鹿児島大学
部局名：法文教育学域法文学系
職名：准教授
研究者番号(8桁)：70713981

(2)研究協力者

研究協力者氏名：中村菜穂
ローマ字氏名：NAKAMURA Naho

研究協力者氏名：前田君江
ローマ字氏名：MAEDA Kimie

研究協力者氏名：鈴木珠里
ローマ字氏名：SUZUKI Shuri

研究協力者氏名：石井啓一郎
ローマ字氏名：ISHII Keiichiro

研究協力者氏名：徳原靖浩
ローマ字氏名：TOKUHARA Yasuhiro

研究協力者氏名：細田和江
ローマ字氏名：HOSODA Kazue

研究協力者氏名：磯部加代子
ローマ字氏名：ISOBE Kayoko

研究協力者氏名：岡崎弘樹
ローマ字氏名：OKAZAKI Hiroki

研究協力者氏名：鈴木克己
ローマ字氏名：SUZUKI Katsumi

研究協力者氏名：栗原俊秀
ローマ字氏名：KURIHARA Toshihide

研究協力者氏名：竹田敏之
ローマ字氏名：TAKEDA Toshiyuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。